

目的 前回、われわれは、ヒトの食味嗜好の傾向が食品の種類によってかなり相違はあるものの、一般に幼児期では甘味嗜好の傾向が強く、成人では甘味離れ、酸・塩味嗜好に移行することを報告した。一方、食味嗜好は同一家族内で類似するとも言われるが、その真偽は定かでない。今回は、前回の調査結果を家族ごとに「嗜好指数」で示し、この指数を使用して幼稚園児とその両親間の食味嗜好の類似性の有無について検討した。

方法 個人別に、甘、酸、塩味各5食品の嗜好度をそれぞれ合計し、甘/酸、酸/塩、甘/塩の各嗜好比を求め、それらを「嗜好指数」とした。幼児（男児、女児）とその父母間の食味嗜好の類似性の有無を把握するため、X軸に子どもの、Y軸に親の嗜好指数をとり、その相関を求めた。さらに、両親間の食味嗜好の類似性が高い（嗜好指数の差が小さい）ものについては、両親一子ども間の相関の有無を検討した。

結果 甘>酸、酸>塩、甘>塩の食味嗜好性を示すものが（女児の甘-酸比を除き）幼児では約70%を占めるのに対し、親では（酸-塩比を除き）約40%であった。両親間の嗜好指数は家族ごとにかなり相違するため、父-男児、父-女児、母-男児、母-女児別にそれぞれの嗜好指数の間の相関について検討したところ、いずれにおいても有意性が認められなかった。しかし、両親の嗜好指数の差が小さい（0.1以下）の甘-塩比についてのみ両親の嗜好指数の平均値とその子どもの指数との間には、親子の嗜好が似るような有意の相関が認められた。これらの結果から、幼児の味覚嗜好は、両親の嗜好が酷似する場合のみを例外として、一般に幼児特有の生理的専求により発現するものと認められる。